

「こぎん刺し」製作者に向けた コミュニケーションツールの提案

越田 夏帆[†]・川守田 礼子^{††}

Proposal of Communication Tool for "Koginsashi" Craftsperson

Kaho KOSHITA[†] and Reiko KAWAMORITA^{††}

ABSTRACT

A traditional craft of Aomori prefecture, "Koginsashi", has recently become popular as a kind of handicrafts and new craftsperson have been increasing. This paper analyzes a modern trend of "Koginsashi" works and proposes a communication tool for connecting the "Koginsashi" craftsperson with one another.

Key Words: *Koginsashi, craftsperson, communication tool*

キーワード: こぎん刺し, 製作者, コミュニケーションツール

1. はじめに

青森県伝統工芸品「こぎん刺し」は、江戸時代以来、津軽地方で継承されてきた刺し子文化である。木綿の着用を禁じられていた農民が、野良着の補強と防寒のために麻布に木綿の糸地刺しを施したのが始まりだが、やがて緻密な幾何学模様へと発展し、津軽地方を代表する伝統工芸として現代に継承されている。津軽地方の寒さと貧しさの中で生まれ、農村生活を支える用の美として受け継がれてきた「こぎん刺し」が、最近では手芸の一種として広く親しまれるようになり、「こぎん刺し」製作に取り組む手

芸愛好家が全国的に増加している。特に首都圏においては「こぎん刺し」のカルチャー教室やワークショップなどが盛んに行われ、人気を集めている。こうした動きは、認知度の向上や製作者層の拡大など「こぎん刺し」の普及に貢献している一方、配色の自由化、模様の自由化、素材・アイテムの自由化、刺し方の自由化など、「こぎん刺し」の伝統技法からの逸脱を促している。見た目の可愛らしさやデザイン性のみが重視され、「こぎん刺し」の特徴である単体模様が崩れる、他の刺し子や刺繍との区別が曖昧になるなどの課題が生じている。

本研究では、現代作家の「こぎん刺し」製品および新規製作者の「こぎん刺し」作品の傾向に関して調査・分析を行い、「こぎん刺し」作品の現状を明らかにする。また、新規製作者対象のアンケート調査に基づき、「こぎん刺し」の多様性を活かしながら伝統継承を目指す方策として、製作者どうしがつながるコミュニケーションツールについて提案したい。

平成 30 年 12 月 10 日受付

[†] 感性デザイン学部創生デザイン学科・4年

^{††} 感性デザイン学部創生デザイン学科・准教授

2. 青森県伝統工芸品こぎん刺しの概要

現代の製品・作品との比較を行ううえで、「こぎん刺し」の伝統技法について調査した。模様、配色、素材、アイテムの各項目について以下にまとめる。

模様の特徴は二点ある。第一は、1目、3目、5目と奇数律で縦糸をすくって横刺しする点である。同県南部地方の「南部菱刺し」が偶数律で2目ずつずらして刺していく点と対照的である。結果、「南部菱刺し」が横長の菱模様を形成するのにに対し、「こぎん刺し」は正方形に近い菱模様となる。ただし例外として「そろばん刺し」など偶数目数の模様も存在する。

第二は菱模様を単位とする点である。弘前こぎん研究所によれば「モドコ」と呼ばれる伝統的な基礎模様が現在40種類ほど存在しており、「マメコ」「ハナコ」「クルビカラ」「ベコ刺し」など農耕生活と関わりの深い動植物および生活用具が主にモチーフとして使用されている。これら基礎模様を組み合わせで連続した模様を構成する。青森県北津軽郡中泊町にある中泊町博物館で開催された企画展「北の刺し子～津軽コギンの世界～」に出展された「こぎん刺し」の古作には、基礎模様どうしの間を小さな基礎模様や地刺しによってびっしり埋め尽くすように刺した緻密な模様構成のものが多数見られた。農耕着の補強と防寒という「こぎん刺し」の本来の目的に沿った伝統的な模様構成といえる。

配色および素材は、江戸時代、藩からの儉約令により色系の使用を禁じられていたため、藍染の麻布に白い木綿糸を用いるのが主流であった。紺地に白糸というシンプルな色彩構成が伝統的な「こぎん刺し」である。製作されたアイテムは農民の仕事着、生活着が中心であった。

3. こぎん刺しの現代的展開

3.1 こぎん刺しの製作者

青森県伝統工芸品指定認証を付した正規の「こぎん刺し」製品は県指定伝統工芸士が製作

したものである。青森県庁ホームページ「青森県伝統工芸士一覧」によれば、現在「こぎん刺し」で認定されている伝統工芸士は5名である。しかし、他にこぎん刺し作家と称する製作者が多数存在し、イベントやワークショップ、製品販売などを活発に行っている。津軽地方の雑貨ショップや観光施設等で販売されている「こぎん刺し」製品の中には、伝統工芸士ではない作家の手によるものが多数見られた。伝統工芸品との差別化に緩やかさがうかがえる。

「こぎん刺し」の継続的学習・製作機会は、カルチャースクール等の講座を通して全国的に拡大している。例えば、読売・日本テレビ文化センターのよみうりカルチャーでは関東圏を中心に20教室を運営しているが、刺繍・刺し子・パッチワークジャンル講座に「こぎん刺し」が含まれている。NHK文化センター、カルチャーセンター産経学園、ヴォーグ学園などの日本ヴォーグ社のスクールも同様に「こぎん刺し」教室を開講しており、気軽に「こぎん刺し」を学べる環境が多数あることが分かった。また、メディア掲載を通して「こぎん刺し」を知り、市販の書籍やウェブサイトの情報に基づき独学で製作を行っている人も見受けられた。

3.2 こぎん刺しの製品・作品

津軽地方のショップで「こぎん刺し」として販売されている製品、および、SNS上で「#こぎん刺し」で投稿されている作品を対象とし、現代的傾向について分析を行った。前者は、ティッシュケース、コースターなど生活雑貨を中心とした小物が多い点が特徴で、カラフルな色彩と伝統模様の柔軟な組み合わせが多くみられた。伝統模様を大事にしている製作者がいる一方で、「こぎん刺し」なのか刺繍なのか曖昧なものもあった。「リンゴ」を象った、伝統的な基礎模様にはないオリジナル模様も見られた。後者のSNS上の作品はアイテム、素材、模様、色彩がさらに多岐にわたっており、明らかに「こぎん刺し」とは異なる技法の作品が「こぎん刺し」として投稿されているなど混乱が顕著であった。

3.3 製作者へのアンケート調査

「こぎん刺し」製作に関わる製作者、特に伝統工芸士や作家といった製品販売に携わる専門家ではない製作者層の意識を明らかにする目的で、「こぎん刺し」情報サイトkoginbankの協力を得て、googleのアンケートフォームを利用したアンケート調査を行った。対象はSNSで定期的に「#こぎん刺し」を利用し、作品を投稿している製作者87人である。質問項目は、製作目的や学習方法、定義・技法の理解度などに関わる16問である。

回答者の年齢分布は40代が約40%と多く、30代・50代が約25%、20代・60代は少数であった（図1）。学習手段として手芸に関する書籍を挙げた人が44.8%と最も多く、次に独学と回答した人が29.9%と多く、教室で定期的に通っている人が17.2%と他に比べ低い結果となった（図2）。

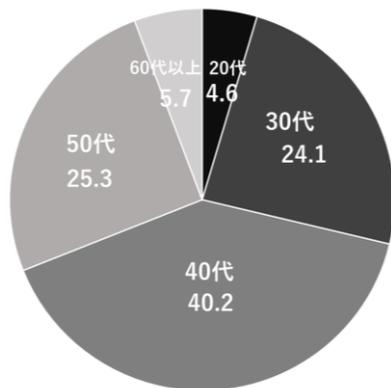


図1 年齢

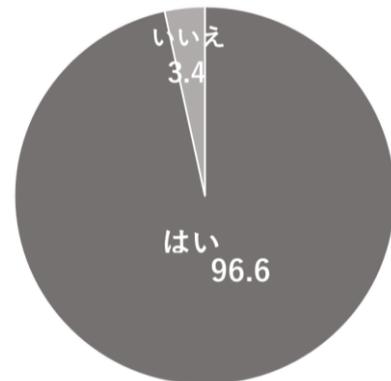


図3 基礎模様があるのを知っているか

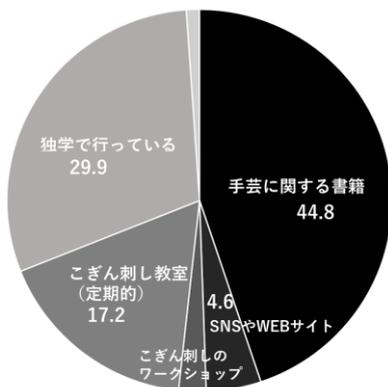


図2 どのように学んでいるか

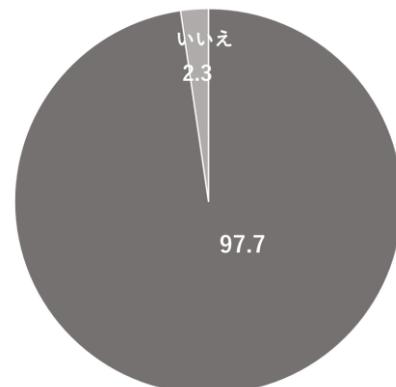


図4 奇数律で刺すことを知っているか

「こぎん刺し」に基礎模様があることについては 96.6%（図3）、奇数律で刺すことについては 97.7%（図4）が「知っている」と回答しており、大多数が「こぎん刺し」の定義について理解していることが分かった。しかし、「こぎん刺し」作品と、「南部菱刺し」「庄内刺し子」など他の刺し子作品、および、全く異なる刺繍作品の複数の画像の中から「こぎん刺し」を選択してもらう質問では、「こぎん刺し」の理解度にばらつきが見られた。「こぎん刺し」作品を「こぎん刺し」と選択したのは 94.3%と高いが、「庄内刺し子」作品を「こぎん刺し」と選択したのは 39.1%、「南部菱刺し」作品を「こぎん刺し」と選択したのは 63.2%もいた。定義として「こぎん刺し」の特徴は理解しているが、実際の区別が明確ではないことが分かった。

4. コミュニケーションツールの提案

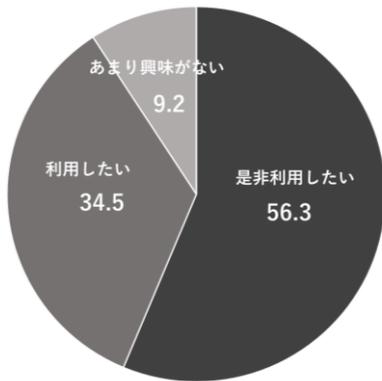


図5 情報共有できる場があれば利用したいか

回答者のコメントには「最近地刺しのような作品があり定義が分からなくなりそうになる」

「最近の流行で間違った技法が溢れているため伝統工芸を守る意味でも新しい模様をこぎん刺しと呼んでいいのか疑問である」といった「こぎん刺し」の現状を不安視するコメントも見られた。「こぎん刺しの特に何が知りたいか」という質問では「刺し間違いの修正方法」や「モードコを組み合わせたときの方法」など刺し方の具体的な技法に関するものが多かった。「こぎん刺しを楽しむためにどんなことやものがあったらよいか」という質問には、作品の展示会、身近に通える教室、「こぎん刺し」について話せる人や場所、情報交換の場、作品発表や交流の場を求める声が多く見受けられた。また「こぎん刺し」に用いる手芸道具をとり扱っている店舗情報を求める声もあった。

前述の通り「こぎん刺し」のカルチャースクールやイベント等は増加しつつあるが、そういった機会への参加が難しい製作者が存在し、一般的な文献では得にくい情報を求めていることが分かった。「こぎん刺しの情報共有できる場があれば利用したいか」という質問では「是非利用したい」「利用したい」と回答した人が合わせて90.8%と、多くの製作者がコミュニケーションツールを求められていることが明らかになった。

以上のアンケート調査結果により、学習・製作機会の急速な拡大および伝統技法からの自由化が進んだことにより、むしろ製作方法に戸惑う製作者が増加していることが明らかになった。カルチャースクール等の直接学習の場への参加が限られている製作者は、我流の刺し方に自信を持たず、また修正の場も見出せず不安を抱えている人もいることがわかった。

これらの課題を解決するために、製作者どうしが情報交換し、技法や歴史など「こぎん刺し」に関する理解を相互に深めるコミュニケーションツールとして、本稿では「学び・楽しむ」をコンセプトとした情報サイト「kogin log」を提案する。図6～図9はサイトコンテンツおよびデザイン案である。サイトの主旨を掲載した「Top」(図6)のほかに、「Wisdom」(図7)、「Gallery」(図8)、「Information」(図9)で構成される。

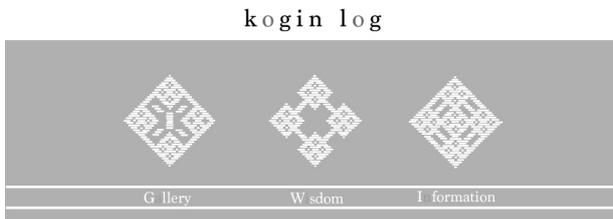
最も特徴的なページ「Wisdom」は知恵袋のようなもので、伝統技法の伝達とともに、相互の疑問を製作者どうしで解決していくことを目的としたページである。アンケート調査のコメントを見ると「古作のこぎん作品をもっと見たい」「こぎん刺し独特の用の美が素晴らしい」「先人の知恵や歴史的背景を知れば知るほど好きになる」など「こぎん刺し」の伝統的側面に興味を持つ製作者が多いことから、「こぎん刺し」に関する詳細な解説を掲載するページを設けた。また、例えば「刺し間違いの修正方法」を知りたい製作者に対し、知識を有している他の利用者が情報を提供するなど、製作の上での疑問点を相互に解決することができる「学びあい」の機能を持たせた。知識がウェブ上で共有・更新されることによって広範囲にわたる「学びあい」「教えあい」が可能となる。

「Gallery」では、自分の作品を投稿でき、かつ投稿された作品を多数閲覧できる。相互の作品鑑賞は、製作意欲を向上させるとともに、他の刺し子や刺繍との比較・区別につながると考え

る。

「Information」ではイベント・ショップ等の情報交換を行う。「こぎん刺し」に特化したSNSをイメージした。全国各地で開催されている展示会・ワークショップ等の情報を製作者どうしで交換し、近隣エリアでの直接交流に接続しようとするものである。

これらのサイト案を、アンケート調査協力者対象に提示し評価を行った結果、概ね好感を得ることができた。居住地域に教室、ワークショップなど直接交流の機会がない製作者からは、「本サイトによって気軽に相談もできるし、本来の刺し方を確認でき技術向上につながるのではないか」「糸や布の情報、展示会の情報など知りたいことが共有できるのは助かる」といった意見が寄せられた。



こぎん刺しを楽しむ「koginer」を繋ぐコミュニティサイト。
こぎん刺しをもっと好きになる。
時間がなくても、近くに通えるワークショップがなくても
こぎん刺しについて学びたい人のためのサイトです。

図6 top

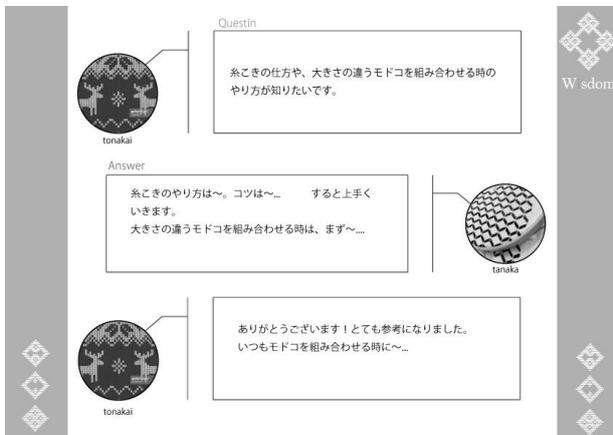


図7 Wisdom

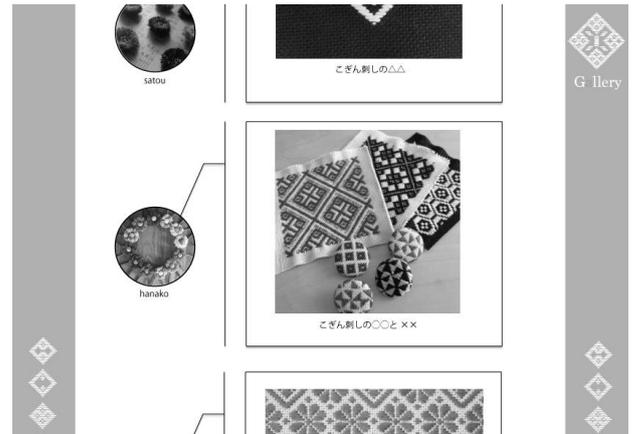


図8 Gallery

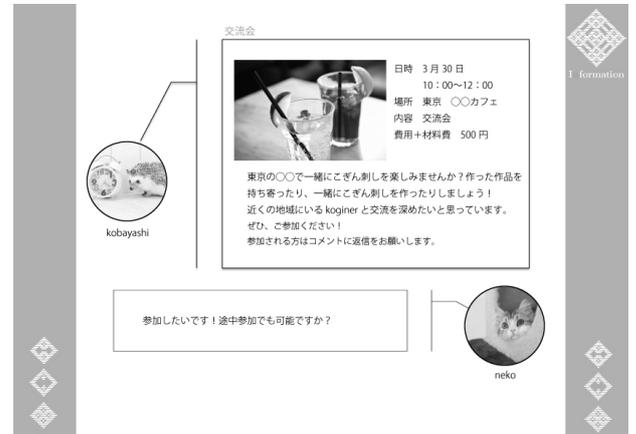


図9 Information

5. まとめ

本稿では、「こぎん刺し」製作者をつなげるコミュニケーションツールとして、情報サイト「kogin log」を提案した。広範囲の製作者層に対しウェブ上で交流する場を提供することで、製作者層のさらなる拡大と活性化が図れる点、「こぎん刺し」製作の経験値の違いが製作者どうしの「学びあい」「教えあい」を促し、伝統的側面の理解につながる点を主な効果として提示した。本サイトの実際の運用に基づいた検証が必要であるが、それは今後の課題とする。「こぎん刺し」は高いデザイン性と取り組みやすさが魅力だが、多様性を持ちつつ「用の美」としての本質を見失わない発展の方策を今後も検討していきたい。

謝 辞

アンケート調査に際し、ご協力くださった製作者の皆さま、参考資料として作品を提供してくださった方々に感謝を申し上げます。

参考文献

- 1) 弘前こぎん研究所：津軽こぎん刺し 技法と図案集，誠文堂新光社，2013
- 2) 日本ヴォーグ社編：東北の刺し子 庄内刺し子 津軽こぎん刺し 南部菱刺し，日本ヴォーグ社，2016
- 3) 秋山泉：津軽こぎん刺しと刺し子，L I X I L 出版，2006
- 4) そらとぶこぎん編集部：そらとぶこぎん創刊号，津軽書房，2017
- 5) そらとぶこぎん編集部：そらとぶこぎん第2号，津軽書房，2018
- 6) 有限会社 弘前こぎん研究所ホームページ：<http://tsugaru-kogin.jp/>，最終アクセス 2018 年 12 月 10 日
- 7) 中泊町博物館ホームページ：<http://www2.town.nakadomari.aomori.jp/hakubutsukan/>，最終アクセス 2018 年 12 月 10 日
- 8) 青森県庁ホームページ：青森県の伝統工芸品 http://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/shoko/chiikisangyo/dento-kogei_aomori.html，最終アクセス 2018 年 12 月 10 日
- 9) よみうりカルチャー：読売・日本テレビ文化センター，<https://www.ync.ne.jp/>，最終アクセス 2018 年 12 月 10 日
- 10) NHK カルチャー：NHK 文化センター，<https://www.nhk-cul.co.jp/>，最終アクセス 2018 年 12 月 10 日
- 11) カルチャーセンター産経学園：産経学園，<https://www.sankeigakuen.co.jp/>，最終アクセス 2018 年 12 月 10 日
- 12) ヴォーグ学園：日本ヴォーグ社，<https://www.voguegakuen.com/>，最終アクセス 2018 年 12 月 10 日
- 13) koginbank：<https://koginbank.com/>，最終アクセス 2018 年 12 月 10 日

要 旨

青森県の伝統工芸品「こぎん刺し」は、最近では手芸の一種として親しまれ、新規製作者が増加している。本稿では、「こぎん刺し」作品の現代的傾向を分析し、「こぎん刺し」の製作者どうしがつながるコミュニケーションツールを提案する。

キーワード：こぎん刺し，製作者，コミュニケーションツール